

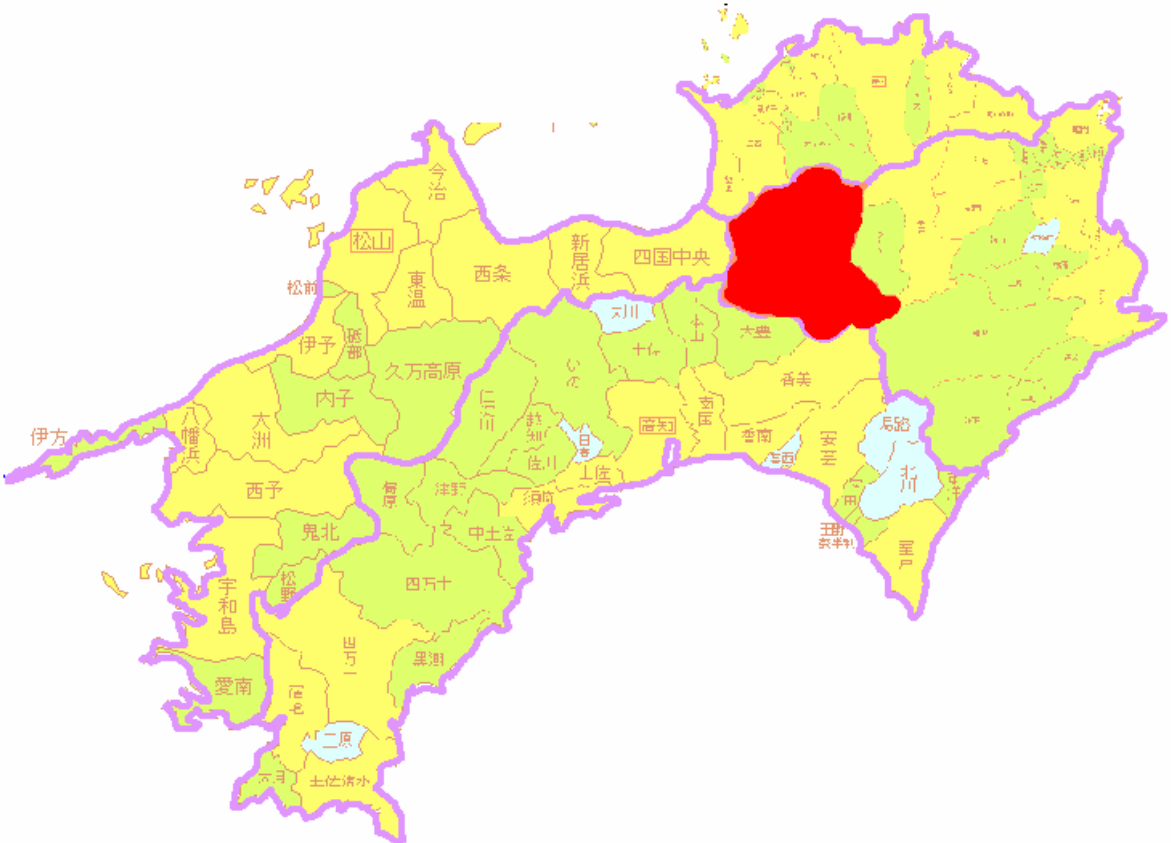
# 三好教育ネットワークセンターの活動と成果



徳島県三好教育研究所  
(三好教育ネットワークセンター)  
中川 齊史

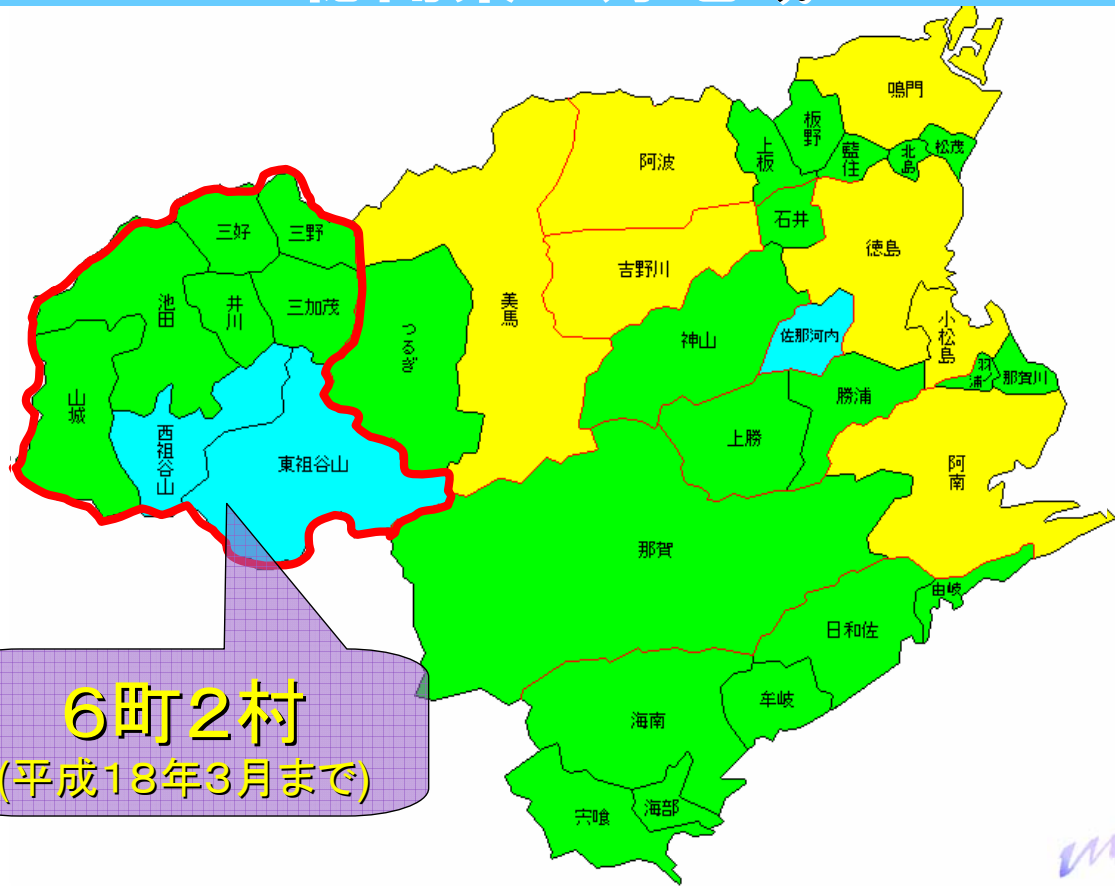
*mark*

## 徳島県三好地域



*mark*

# 徳島県三好地域



**6町2村**  
(平成18年3月まで)

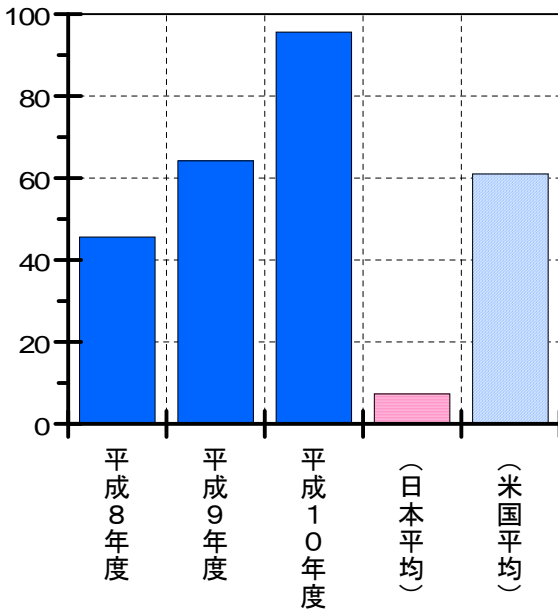
# 小学校37校 中学校9校



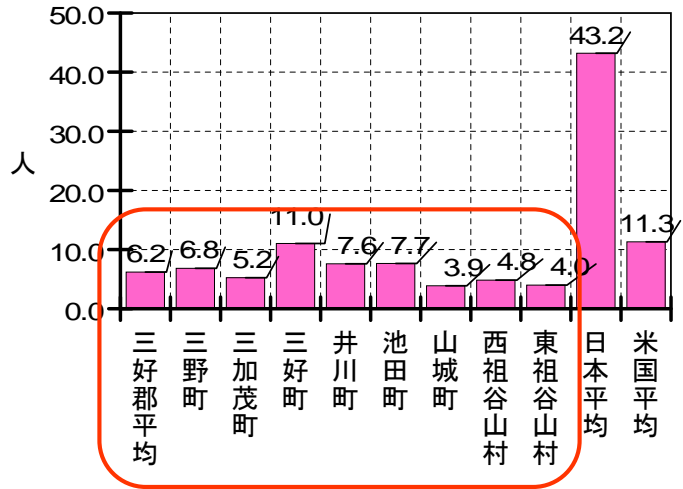
児童生徒数 約3900人  
教職員数 約550名  
(平成19年5月現在)

# 平成10年当時の三好地域

インターネット接続率の推移（三好郡）



パソコン1台あたりの児童数  
全校児童数から算出



その当時としては、全国的にも情報教育が進んでいた地域

*mkk*

## 三好地域が情報教育に早くから取り組んでいた背景

- 歴史的に、郡レベルで教育研究所を持つなど、県内の教育を推進してきた地域
- 山間へき地校を多くかかえるため、地理的ハンディを感じさせない教育をすすめたいという地域の人々の願い
- 地元教材社の献身的な支援
- 情報視聴覚部会(研究会)による研修推進

*mkk*

## 平成10年の話

- 平成10年当時，一般プロバイダを利用した三好郡内の学校のインターネット接続率は95%

- 高速インターネットがほしい(都市部に比べて，高速インターネットサービスは期待できない)

民間ADSL開始は平成15年頃。現在でもISDN地域は存在。

- 郡内の町村が別々にネットワークを構築すると，設定の引き継ぎ，メールアドレスの変更など教員異動時に困る

## チャンス到来 平成11年

- 旧郵政省，文部省の「学校インターネット1」事業の募集→応募・採択

- 三好郡教育研究所の存在

- 情報教育実践者の存在(当時，各校に1人以上存在)

- 事務局が必要

情報教育に明るくて，現場をとりまとめる存在が必要

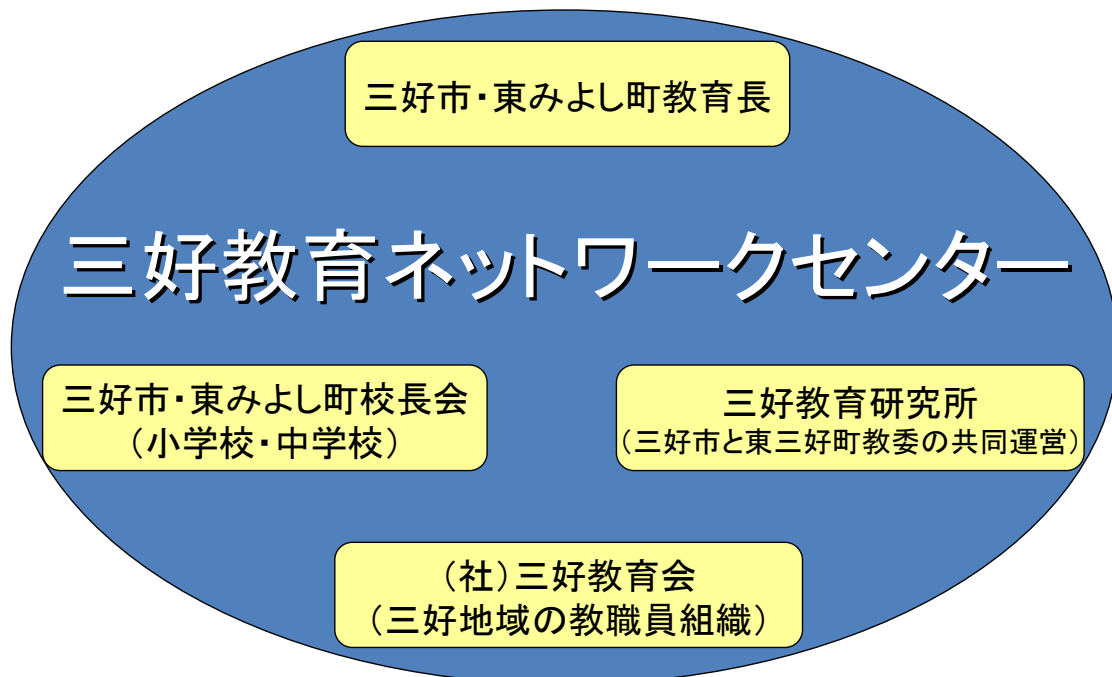
## 人が必要な理由

- よい実践を紹介し、指導できる人間
- 様々な授業でTTを組める人間
- 現場の技術障害に対応できる人間
- 校内研修を支援できる人間

ICTコーディネータを配置

mkk

## 組織の関係



mkk

## 広域ネットワークセンターの価値

### 施設面

- セキュリティ・フィルタリング, Web, メールアカウント(接続拠点)



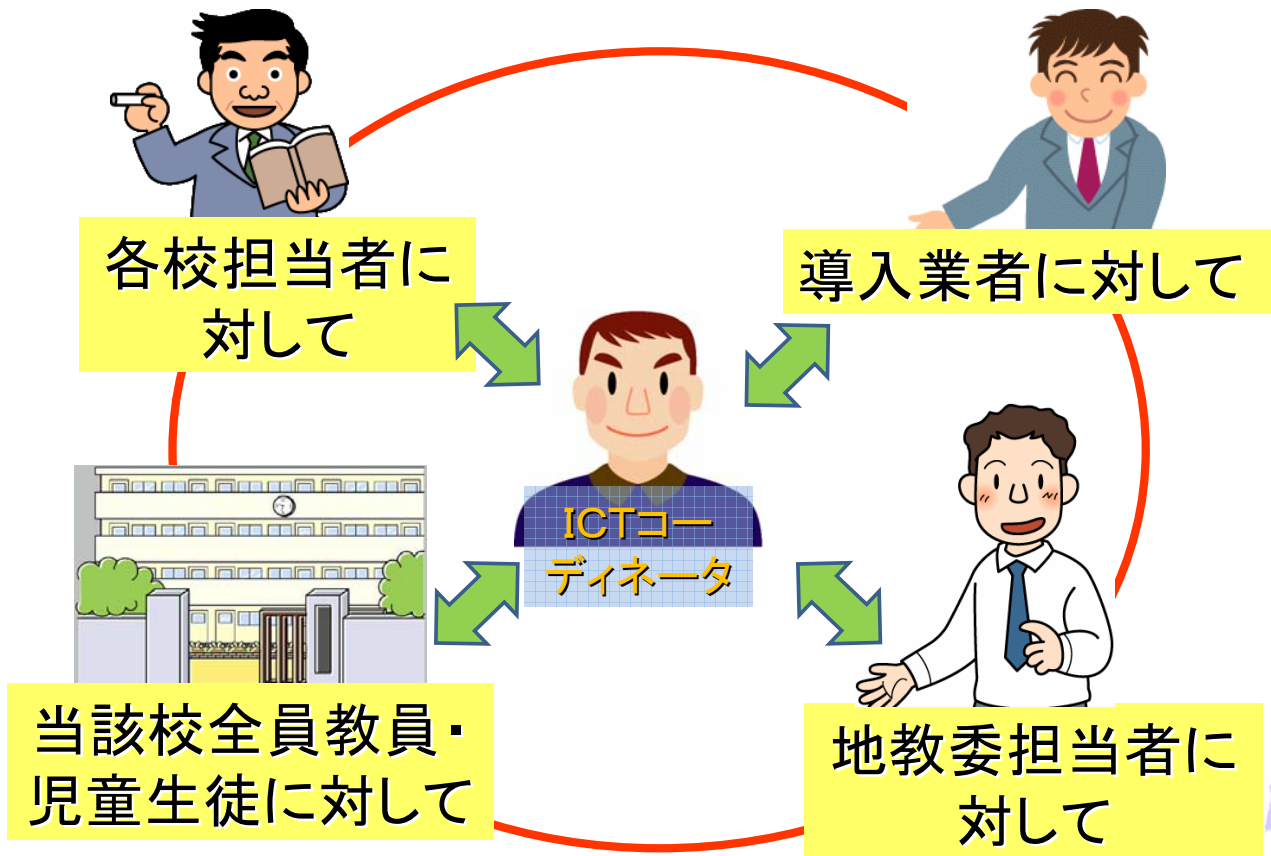
### 人材面

- 地教委や規模に関係なく同様の情報サービス
- 授業支援, 技術支援をフリータイムで

## ICTコーディネータの配置

平成11年度	1名(現場教員)	5町
平成12年度	1名(現場教員)	5町
平成13年度	2名(現場教員)	8町村
平成14年度	2名(現場教員)	8町村
平成15年度	2名(現場教員)	8町村

# ICTコーディネータの位置づけ



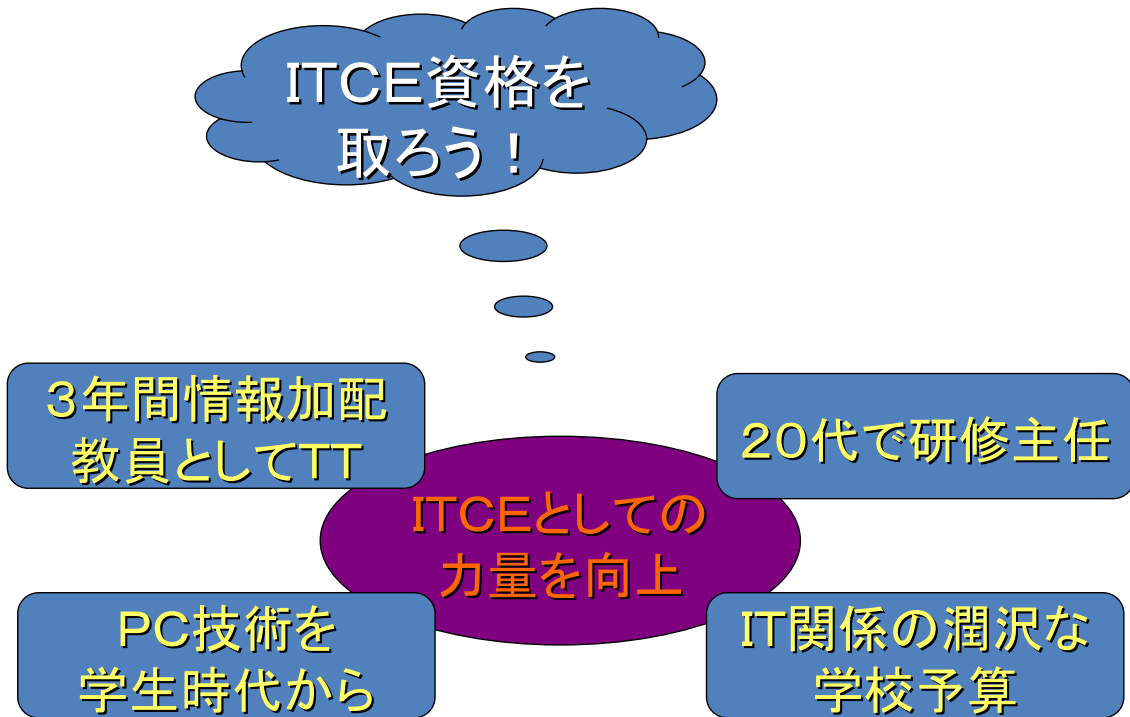
## 実際の業務

だれに？

何を？

地 教 委	導入計画支援
	仕様書作成
	各種検収確認
各 校 担 当 者	高度技術伝達
	校内LAN管理支援
	校内研開催支援
各 校 全 教 員 徒	校内研修
	各種授業支援
	担任との授業TT
導 入 業 者	トラブル初期対応
	技術情報共有

## これはまさにITCEの立場



mkk

## ITCE資格者としての中川個人の研鑽

### 1 情報技術を磨く

専門誌の定期購読・セミナー参加による最新情報の入手と、関連企業との共同研究等による情報の入手。

### 2 授業研究を磨く

教科に偏りなく積極的に授業公開研に参加。各組織からの助言者依頼を積極的に受諾。

### 3 研修・組織マネジメントを磨く

複数校の校内研修等を積極的に企画。数多くの学校を訪問視察することで、学校組織の中での教員の動きや校務分掌の流れを感覚的につかむ。

### 4 学術研究を磨く

各種情報教育系の学会での積極的な論文発表により、自分の取り組みを客観的に評価してもらう。

mkk



## ICTコーディネータの成果

対:学校現場

### 1 技術支援

現場担当者がすぐ対応し、「授業で使えない」という状況を回避

### 2 授業支援

担任とTTを組み、実際の授業をやりながら、イメージをつかんでもらう

学校間、担任間の利用格差の解消

### 3 研修支援

校内研修等では授業者という立場から研修を開催

*mkk*

## ICTコーディネータの成果

対:導入業者

### 1 技術支援

初期対応をICTコーディネータが行うので、不具合状況をすぐに伝え、早い対応が可能になる

### 2 授業支援

教師がどのようなことをつまずいているかを技術的視点で伝達できる

### 3 研修支援

技術研修に同席することで、教員相手の研修の仕方を学ぶことができる

*mkk*

# ICTコーディネータの成果

対:地教委

## 1 技術支援

業者からの専門用語を翻訳し、現場に必要なかどうかを判断

## 2 授業支援

ICTを活用することで、どのような授業が展開でき、どのような効果が期待できるか説明

## 3 研修支援

現場教員と顔見知りであり、地域の様子を熟知している人間による研修開催は、効果が高い

*mkk*

# ICTコーディネータの育成

## 1 いっしょに行動する

2名体制のときに、徹底して2人で回る。現場における依頼状況をどのように瞬時に判断しているかを感じ取らせる。

## 2 各校の情報担当者の力になる

ICTコーディネータが何でも解決してしまうのではなく、各校の情報担当者の力量を向上させ、彼らが問題解決できるようにすることで、将来のICTコーディネータを育てる。

## 3 やる気のある若者を手厚く支援

授業研究に意欲のある教師や、ICTを使って授業改善をしようとしている教師を、私的サークル活動として、切磋琢磨する場を設ける。

*mkk*

# ヘルプデスクとの業務の切り分け

	主な連絡調整先	行動範囲	運用の視点
ヘルプデスク	ベンダー 現場	センター内	技術的
ICTコーディネータ	現場 地教委	学校現場	授業的

mkk

## そして現在は……

		運営形態	運営内容
1999(平成11)	加配教員 配置	文科省・総務省の 100%負担事業(学 校インターネット事 業)	<ul style="list-style-type: none"> <li>サーバ施設の設置</li> <li>回線運用</li> </ul>
2000(平成12)			
2001(平成13)			
2002(平成14)			
2003(平成15)			
2004(平成16)	研究所員 (研究テーマ合致)	8町村負担で合同 運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>サーバ関係は完全アウトソーシング</li> <li>回線は民間利用</li> <li>現場支援機能を残す</li> </ul>
2005(平成17)		合併により1市1町 負担で合同運営	
2006(平成18)			
2007(平成19) ~			

mkk

## まとめ 学校CIOによせて

### 1 CIO補佐官としての位置づけ

- CIOは、最高責任者として、教育長などが兼務するのが現実的
- むしろCIO補佐官を、確実に位置づけることが必要(課長レベル)
- 都道府県教委に置いても、都道府県立学校にしか影響がない
- 市町村教委では数が多すぎるので、当分の間、ある程度複数の地教委を広域に担当できるようにする

### 2 必要な立場

- 教育委員会、学校現場、導入業者との連携が重要なので、それぞれの場所に遠慮なく立ち入れるような立場(公開研、業者主催のセミナーなどへ気軽に足を運ぶことが必要)
- CIO補佐官の印がなければ、学校へのICT機器整備の検収が終了しない等の権限

### 3 必要な資格

- 教育情報化コーディネータ(ITCE)準2級以上(教員免許)

### 4 CIO組織

- 各地域のCIO補佐官が情報交換し、研修できる組織や会合を設ける

mkk

## まとめ 学校CIO(補佐官)育成は？

### 1 役割はわかっても、イメージを持ちにくい

必要な力量とそれに必要なカリキュラムが不確定

### 2 とりあえず名指しで就任

イメージ化、インパクトをあたえることで注目

### 3 内部の人間を研修で育成

育成プログラムはインターンのように(交渉経験、設計経験)

### 4 外部団体が育成する

「ITCE資格=CIO補佐官」としてそのまま利用(ITCE資格へのアドバンテージ)

mkk

# ICTコーディネータの成果

## 1 技術支援

各学校に設置されているコンピュータなどの機器は、校内の管理者(情報主任)によって運用がなされているが、授業に応じて変化する機器のセッティングや、子ども達による各種の設定変更など、些細な部分での技術的な対応を迫られている。大きなトラブルについては、業者が対応するが、そうでない部分についてちょっとしたアドバイスをすることで、解決し「授業で使えない」という状況を回避してきた。

## 2 授業支援

ICTを利用する授業をどのように行っていけばよいかということについて、経験のない教員に対し、TTを組み、実際の授業をやりながら、イメージをつかんでもらうことで、各学校での積極的なコンピュータ利用を図ってきた。

また、担任によって「使う・使わない」という状況を起こさないためにも、様々な交流などのきっかけを持ちかけ、学校間、担任間の利用格差の解消につとめてきた。

## 3 研修支援

校内研修において、現場教員の様々な要望がある。単なるアプリケーションの使い方ではなく、情報教育がなぜ重要なのか、ホームページを作ることはどうして必要なのか、そして、どのような実践が、情報教育の視点を生かした授業といえるのかなどについての研修を行ってきた。情報化社会を生きる子ども達を育てるために必要な技能や考え方について、授業者という立場から研修をすすめてきた。

*mkk*

# ICTコーディネータへの期待(平成14年)

- 校内研修の講師として指導してほしい
- その学校の機器の配置の具合などを診断し、適切なアドバイスをおねがいしたい。
- 定期的に学校を巡回してほしい
- 学年に応じた効果的なソフトウェアの紹介や使い方の情報を流してほしい
- 学校の方へどんどん来て、教えていただけるとありがたい。
- 各学校の機器類の整備と点検、トラブルの解消、教員への指導など
- 地教委への働きかけなどにも力を貸してほしい
- 困ったときにすぐに電話で答えてくれるので、心強い。
- パソコンなどを使った授業の時、TTを組んでくれるとありがたい。
- 出張講座的なものがほしい。
- 町村で1名、または各校に1名いれば、とてもいいと思う。
- 専門的な知識や技能を持っている方がいるというのはとても心強い

*mkk*

# 三好教育ネットワークセンターをふり返って

## 教育ネットワークに必要なもの

e-JAPAN構想により、多くの地域で学校の情報化が進んでいる。インターネットの高速化や端末の高規格化、周辺機器の充実、校内LANの整備、授業用コンテンツの拡充など、多額の予算をかけて整備が進む一方、十分使いこなせていないのではないかという声も聞こえてくる。

学校インターネット事業も、それに近いものがあるかもしれない。我々の住む地域では、機器の整備や、高速ネットワークの配備とともに、これらをどのように現場で活かしていくかを重点に置いた人的システムの取り組みをしてきた。

結論から言うと、機器やネットワークの整備に加えて、現場を回ることのできる人の配置が必要であるということになる。

## 指定校すべてがよく似たレベルに

情報教育関係で、すばらしい実践をされている先生や学校は、全国にたくさんある。しかし、学校インターネットの指定校すべてが研究にふさわしい実践をおこなっているかという点、そうではないだろう。現場にとって、新しいものは、学校間の取り組みの差を生んでしまう。

ところが、私どもの地域では、指定校のほとんどにおいて、一定のレベルの情報教育実践が行われている。(100%とはいえないが)地域内のどの学校を見ても、取り組みの格差が少ない状態になっている。

## 機器や通信インフラに加えて必要なものがある

なぜこのように、機器の整備後の学校ごとの取り組みに差が少ないかというと、そこには、地域ネットワークのICTコーディネータ制度があったことがあげられる。このネットワークセンターには、現場を指導して回れる教員がいる。この教員には、次のような特徴がある。

- ・現職である(加配教員)
- ・教諭格である(指導主事, 研修主事ではない)
- ・コンピュータやネットワークについての技術的スキルを有している(ITCE資格等)

## どうしてもほしかった高速インターネット

こういう状況から学校インターネット事業には特に積極的に手を挙げ、現在に至っている。民間のサービスが受けられない地域にとっての学校インターネット事業は大変価値のあるものである。ただし、インフラだけの整備で終わらず、しっかりと利用できるような人的配置が特に必要だということで、8つの町村の合意のもと、現在のようなICTコーディネータの配置が決まった。

## 地域ネットワークセンターはこうあるべきだ

今回紹介したような我々のネットワークセンターは、人事関係の内容を含むので、すぐどこでもまねはできないかもしれない。しかし、新しいことを始める以上、「モノ」「金」のあとにもう一つ「人」が必要であることは、事実である。

我々がいつも考えているのは、「子どもたち」である。子どもたちが困っている姿を想像しながら、よりよい解決策をもって、現場へ向かう。地域内のいろいろな学校から、少しずつ特色ある実践が増えてきて、さらに人の輪が大きくなっていることを実感している。

*mkk*